

一八八四年九月二十一日(日)

聖ラーマクリシユナ、ドツキネーシヨル南神村で信者たちと共に——カルカタでチャイタ  
ニヤ・リーラーを観劇

ラカール、ナラン、ニティヤゴパール、および若いゴパール

今日は一八八四年九月二十一日、日曜日。ベンガル暦二二九一年アッシン月六日。タクール、聖ラーマクリシユナの部屋に大勢の信者たちが集まっていた。ラーム、マヘンドラ・ムクジェー、チュニラル、校長、その他多数である。

チュニラルは、聖地プリンダーヴァンから戻ってきたばかりだ。彼はそこに、ラカールとバララムと共に行ったのである。しかし、ラカールとバララムの二人はまだ帰ってこない。ニティヤゴパールもそこに行っている。タクールはチュニラルを相手に、プリンダーヴァンの話をしていらつしやる。

聖ラーマクリシユナ「ラカールの具合はどうだい？」

チュニラル「はあ、今はもうすっかり良くなりました」

聖ラーマクリシユナ「ニティヤゴパールはまだ帰らないのか？」

「チュニラル「私が発ちました時には、まだあちらにおられました」

「聖ラーマクリシュナ「お前の家の人たちは、誰といっしよに帰るんだね？」

チュニラル「バララームさんが、誰か信用のおける人をつけて送りとどけて下さる、とおっしゃいました。それが誰だか、名前は教えて下さいませでしたか——」

タクールは、マヘンドラ・ムクジエーとナランの話をおはじめになった。ナランは学生で、十六、七才である。タクールのところへ時々通ってくる。タクールは彼が大好きである。

「聖ラーマクリシュナ「まっ正直で誠実だねえ、そう思わないかい？」

「正直ケ誠実ケという言葉をおっしゃるとき、タクールは満面に喜びがあふれておられた。

「マヘンドラ「はあ、おっしゃる通り、ほんとに誠実な人ですね」

「聖ラーマクリシュナ「あれの母親がいつか此処へ来たよ。高慢な様子を見て、わたしや恐ろしくなった。あとからお前たちが来たり大佐キレンが来たりしたから、それを見てきつと、此処へはナランと自分だけが来ているのじゃない、と思つたにちがいない（一同笑う）。氷砂糖が部屋にあるのを見つけて、『まあ、けつこうな氷砂糖でございませうこと！』と褒めたよ。それできつと、ここでは食べるものに不自由しない、ということがわかつたらうさ。」

「そうだ、そのときバブラームに、『お前とナランのためにサンデシユの菓子を少しとっておけ』と言つたつ。その後でガニの母親が、『ナランは、ここに来るための舟賃を母親にねだっていましたよ』と教えてくれた。ナランの母親はわたしにこう言うんだよ。『ナランに結婚するようにすすめて下さい』

と。『そういうことは皆、予見できないことだよ』と答えておいた。わたしがそんなことにどうして干渉できる？（一同笑う）（訳註、ガニの母親——ヨージンドラ・モヒニ・ピスワス、愛称ヨージン・マーのこと）

（ナランは）あまりよく勉強しないんだよ。それで、『あなた様からもっとよく勉強するようにおっしゃって下さいまし』と言うから、『ほれ、勉強しろよ』とナランにそこで言いきかせた。そしたら又、こう言う。——『もっと本気になっておっしゃって下さいまし！』（一同笑う）

（チュニラルに向かって）——えいと、ゴパールはなぜ来ないんだね？

チュニ「赤痢にかかっておりますので——」

聖ラーマクリシュナ「薬をちゃんと飲んでいるかい？」

〔劇場で売春婦が演技すること——以前の話——気球見物でクリシュナを思い出したこと〕

タクールは今日、カルカッタのスター劇場に、チャイタニヤ・リーラー（ギリシユ・ゴーシユ作のチャイタニヤの生涯を描いた戯曲）を見物に行かれる予定である。マヘンドラ・ムクジュエーが自分の馬車でお連れすることになっている。どのへんに席をとつたらよく見えるか、という話になった。誰かが、『一タカの席シートに坐ればよく見える』と言った。するとラームが、『何の、この御方には、さじき棧敷席を一ますとってお坐りになっていただく』と言った。（訳註——ベンガル語原典には、スター劇場は「不滅の言葉」コタムリト第二巻が出版された一九一〇年には、コヒヌール劇場となっている、との解説がある）

タクールは笑っていらつしやる。また誰かが、『売春婦がこの芝居のなかに出て演技している』と言っ

た。チャイタニヤデールツア様やニタイの役に、この売春婦たちになつていゝのである。

聖ラーマクリシュナ「(信者たちに向かつて)——わたしはその売春婦たちを、至福アーリナンドグマイの大実母グだと思つて見るよ。あの人たちがチャイタニヤデールツア様の役をしたつて、それがどうだと言うんだ。作りもののアーター(バンレイシ)の実を見れば、本物のアーターを思い出すだろう。

一人のクリシュナ信者が道を歩いているうちに、バブラ(アラビアゴムモドキ)の木の繁みを見つけた。見るとさつそく、半三昧状態になつてしまつた。彼は思い出したんだよ——シャーマスタラ(クリシュナ)を祀つた寺の庭にあつたシャベルの柄エネが、バブラの木でできていることを！ 自然と、シャーマスタラのことを思い出したというわけなんだ！ 要塞広場(現マイダーン公園)に軽気球を見に連れて行つてもらつたとき、イギリス人の少年が体を三つに曲げて樹によりかかつて立っているのを見た。それを見たたん、クリシュナのことをパツと思ひ出して、すぐに三昧に入つてしまつた！ (訳註、クリシュナの立像は首と腰とひざの三方所を曲げているのが一般的で、このポーズをトリパンギという)

チャイタニヤデールツア様がある村を通つていなすつた！ 聞けば、この村の土でキールタン用の太鼓コールの胴を作るという！ それを聞いたたん、半三昧におなりなすつた。

聖シュリ・マデー女(ラーダー)は雲や孔雀のくびを見ると、もうジツとしていられなかつた。クリシュナのことを思い出して外界の意識をなくしてしまつたものさ！ (訳註——クリシュナは孔雀の羽根飾りを付けていた。また、雲が出ると孔雀が羽根を広げて踊ることがよくあるので、それでクリシュナを思い出した)

タクルは少しの間、黙つておいでになる。やがて又、話をお始めになつた。——「聖シュリ・マデー女(ラーダー)

の場合はマハーバーヴァの状態だった。リーダーはじめゴビーたちの愛には、何の欲も一切なかった。真の信仰者は何も欲しがらない。ただ、純粋な信仰のためだけで祈っている。どんな力も、どんな神通力も望まない」

### ナンゲタ・ババの教え——八神通力は神をつかむ障害となる

聖ラーマクリシュナ「神通力をもっているのは、大そう厄介なことだ。ナンゲタがわたしに教えてくれたが——一人の通力をもった男が海岸に坐っていると、折りしも嵐が起こつてきた。彼はおもしろくなく思つて、『嵐よ、静まれ』と言つた。彼の言つた言葉は、その通りにならずにはおさまらない。そのとき一そのの船が帆をいっぱいに広げて進んでいた。嵐が突然止んだので、その船はひっくり返つて沈んでしまった。船に乗っていた人たちは全部、いっしよに沈んでしまった。彼のために大勢の人が死んだんだ。その罪によつて通力を失い、地獄に堕ちてしまった。

ある修行者は大へんな通力を得て、そのために鼻高々だった。でも、その修行者は真面目な人だったので、その後も修行をつづけていた。ある日、至聖は托鉢僧の姿になつて彼の前にあらわれなすつた。そして、こうおっしゃつた。『お上人様！ あなた様は大変な通力の持主であると承りました』修行者は客を歓迎して坐らせた。ちょうどそのとき、一頭の象が通りかかった。すると客僧はこう言つた——『そうだ、お上人様、あなたがもしそう望めば、この象を殺すこともお出来るのでしようね？』修行者は、『ヤーサーー ホーネー サクター（もちろん、出来るとも！）』と言つて、その辺の塵を

つまみ上げて呪まじないをかけて象の体にくつつけると、象は七転八倒して死んでしまった。客僧は、『凄い通力ですね！ こんな大きい象をたちまち殺してしまうとは！』修行者はさも得意げにカンラ、カンラと笑った。すると客僧は、『そうだ、象を元通りに生き返らすことがお出来になりますか？』と言う。サードウは、『オビ ホーネー サタクー ヘエイイ（もちろん、もちろん、それも出来るさ！）』と言いざま、もう一度塵ごみを拾ってまじないをかけ、象にくつつけた。そのとたんに象はムクムクと起き上がり、何事もなかったように向こうへ歩いていった。そのとき、客僧はこう言ったよ。『何という凄い力でしょう！ しかし、一つおたずねいたします。象を殺したり、また生き返らせたりして、あなたに何の益がありましたか？ これによって自分が少しでも進歩なすつたのですか？ 神通力によって至聖かみをつかむことが出来ましたか？』——こう言つて、至聖かみの化身は姿をお消しになった。

『正法ダルマの道はまことに繊細だ。欲望が一つでもあれば、至聖かみにとどくことは出来ない。針に糸を通すには、一つでもケバがあるとだめなんだよ。』

クリシユナがアルジュナにおっしゃった。『弟よ、もしわたし（神）のところに来ようと思つたら、八大神通力のうち、一つでも持つていてはだめだぞ』

どうしてか、わかるかい？ 神通力など持つていると、必ず高慢になる。それが神を忘れさせるんだ。ある金持ちの旦那がここに来た——斜視やぶにらみだったがね。その人がわたしにこう言った——『あなた様は大覚者パラマハンサでいらつしやる。有難いことでございます。ではちよつと、厄除やくよけのまじないをしてくださいませんか』と。低級なやつだ。大覚者パラマハンサに厄除やくよけのまじないを頼むとは——。祈祷をして厄除け

福寄せをする——これも一種の通力だ。増上慢があつては神をつかむことは出来ない。慢心、高慢は何に似ているか知っているかい？ それは高い土塚のようなものでね、雨が降っても水がたまらずに流れてしまう。水は低いところに集まる。そこで種子は芽を吹き、樹になり、実を結ぶ」

〔Love to all(あらゆるものに対する愛)——愛によつて慢心は去り——神をつかむ〕

「だから、ハズラーにもよくこう言いよかせるんだよ。自分はよくわかっているが、ほかの人は皆バカだ、などと決して考えちゃいけない、とね。皆を愛さなけりゃいけない、と。誰も他人じゃないんだ。生きとし生けるもののなかに、あのハリがいなさるんだ。あの御方なしには、何一つ存在しないんだよ。

神がプラフラータに、『お前に何か恵んであげよう』とおっしゃった。するとプラフラータは、『あなた様にお目にかかっただけで十分でございます。これ以上、何も欲しくありません』だが、神は、『ぜひ、何か望め！』とおっしゃる。プラフラータは、『では、このようなお恵みを下さいませ。私を苦しめた人たちに、罰が当たりませんように——』

この意味はこうなんだよ——迫害者の姿で彼を苦しめたのはハリだ——ということ。もし彼等が罰をうけて苦しむとしたら、ハリが苦しむことになるからだ」

聖ラーマクリシュナ、智識の狂人のようになる

〔以前の話(一八五七年)——カーリー殿が建ったすぐ後に智識狂を見たこと——ハラダリ〕

聖ラーマクリシュナ「シユリー・マテイ聖女（ラーダー）は愛に狂っていた。だが、信仰の狂気もある——ハヌマーンのようにね。シーターが火に飛びこむのを見て、ラーマを殺すところだった。それから、智識の狂気というものもある。わたしはいつか、狂人のような智者を見たことがあるよ。カーリー殿が建ったすぐ後のことだ。ラーム・モハン・ローイのブラフマ協会に属していた人だと皆は言っていた。片方にだけポロ靴を履いて、片手に棒切れ、もう一方の手にマンガを植えた鉢を持っていた。ガンガーに浸かつてからカーリー堂に來た。そのとき、ハラダリがカーリー堂に坐っていた。その人はモノに憑かれたような有様でスタグ讃詞を唱えはじめた。（訳註、狂人のような智者——バマケババ狂ったケバマという名の聖者）『クシヨロウン、クシヨロウン、カッタガダーリニー』というような文句をね。それから犬のところにへ行つて、耳をつかんで食い残しを食べたが、犬はワンとも言わない。そのころ、わたしもそれと似たような状態になりかけていた。わたしはフリダイの首に腕をまわして、『なあ、フリダイ、わたしもあんなふうになるんだろうか？』と言った。

わたしの気狂いっぷりときたら！ ナラヤン・シャーストリーがここへ来てみたら、わたしが竹の棒をかついでうろついていた。彼は皆に、『ひゃあ、あの人は気狂いになってしまった』と言ったぞうだ。そんな有様のころは、カーストの区別もさっぱりつかなくてね、低いカーストの男の女房が野菜を料理して届けてくれるのを、わたしは平気で食べていたよ。

カーリー殿のところ、乞食どもが食べた後の葉（皿の代り）を自分の頭や口にくつつけたものだよ。そんなときハラダリは血相変えて、『お前、何てことをするんだ？ 乞食の食い残しを食べたりして、



子供が結婚するときどうするつもりだね？」と言った。わたしは怒ったよ。ハラダリは年上のイトコだが、それがどうした？ 彼に言つてやった。——『それにしても間拔けな男だ。お前さんはギターやヴェーダーンタを読んだらう？ プラフマンだけが實在、この世界は虚仮こけだと人に説教までしているじゃないか。それに、このわたしが今さら子供をつくるなどと想像でもしているのかい！ ギーターを読むその口に、火をつけて灰にしてしまえ！（訳註——低いカーストのものが触れたり食べ残したりした食物を食べると、バラモンの身分を失うことになっていた）

（校長に向かつて）ただ学問しただけじゃ何にもならんことがわかつたか。楽器の譜を口で読むことは簡単だが、手にとつて実際に弾くのが大変なんだよ！」

タクルは、ご自分の智識狂ぶりをまたお話になる。

〔以前の話——マトウールとナバドウィープへ——チネ・シャーンカーリーの足もとにひれ伏す〕

「シエジヨさんといっしょに、いつか屋形舟に乗つて二、三日の船旅に出かけた。この旅行でナバドウィープ（チャイタニヤの生誕地）へも行ったんだよ。見ると、船で乗組員たちが料理をしている。そのそばに立っているとシエジヨさんが、『ババ、ここで何していなさる？』と聞いた。わたしは笑いながら、『船の人たちがうまそうに料理しているよ』と答えた。するとシエジヨさんは、わたしが分けてもらつて食べるかもしれない、と思つたんだらうよ。『ババ、あっちへ行きましょう、あっちへ行きましょう！』と言つてせきたてた。

だが今は、もうそんなことはできない。今はそういう境地ではない。今はバラモンが正式のやり方で料理して、神前に供えたものを食べている。

何という境地を通ってきたものだろう！ 郷里（註）で、チネ・シャーンカーリー（註）や子供時代の仲間に向かって、『あなた方の足もとにひれ伏しておねがいするから、いちどハリの名を唱えておくれ！』と言ったものだ。するとチネはこう言った。『ああ、君は今始めて神に熱狂したので、人の区別がつかなくなつたんだよ』

最初、嵐がはじまつてはこりが舞い上がると、マンゴーの木もタマリンドの木も同じようになる。それがマンゴーだか、どれがタマリンドだか、よく見えなくなる」

〔聖ラーマクリシュナの意見は——社会生活かすべてを捨てることか？——ケーシャブの疑い〕

一人の信者「社会生活をしているものが、この信仰（バチャイ）の狂気とか、愛（プレーマ）の狂気、智識（ジニヤ）の狂気といった状態になつたとしますと、いったいどうして生活していくのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ（在家の信者の方を見て）ヨーギーには二通りある。顕れた（ヴィヤクタ）ヨーギーと

（訳註）チネ・シャーンカーリー——チネは愛称で正式名はシュリーニヴァース・シャーンカーリー。ラーマクリシュナの生誕地カマルプクルに住んでいた人物で、バラモンより低いカーストであったが神への信仰心は強く、ヴィシュヌ派の修行を行っていた。タクルの子供時代からその神性を認めていて、ゴダドル（聖ラーマクリシュナ）をチャイタニヤの化身に違いないと確信していた。

隠れたヨーギーだ。社会生活をする場合は隠れたヨーギーだ。誰も、その人がヨーギーだと気付かない。社会生活をしている場合は、心ですべてを捨てるが、形の上では捨てていない。

ラーム「あなた様は子供をあやすようなことをおっしゃる。社会生活をしていけば、智者にはなれても、ウイジニヤニ者にはなれません」

聖ラーマクリシュナ「終いには覚者にもなれるさ。でもね、無理して世間的なものを捨てるのは良くないよ」

ラーム「ケーシャブ・センはよくこう言いましたよ。『あの方のところへ、どうしてあんなに人が行くのだろうか？ いつか、ひどく咬みつかれて逃げだしてくるにちがいない』と」

聖ラーマクリシュナ「なぜわたしが咬みつくんだらうね？ わたしは皆に、『これもしろ、あれもしろ——つまり、社会生活もちゃんとしろ、神様にも祈れ』と言ってるだけだ。何もかも捨てる、などとは言わないよ、ハツハツハツハ。ケーシャブ・センは、いつか講演でこんなことを言っていた——『神よ、願わくは信仰の河に我等の身を投じ、そのままサッチダーナンダの大海に流れ入ることができませうように——』その時、女たちが大ぜい凡帳のかけで聞いていた。わたしはケーシャブに言ったものさ——『皆がいつべんに投身したらどうなるね！ そんなことしたら、あの婦人たちの境遇はどういうことになる？ 時々は陸に上がることだ。そして又沈む。また上がる！』ケーシャブやほかの人は皆、笑い出したよ。ハズラーがわたしに、『あなたはラジャス性(執註)の人を大そう好かれますね。つまり、金持ちだとか名声の高い人たちだとか——』もしそうなら、じゃ、ハリシユヤノト(ラトゥ)が

大好きなのはどういふわけだ？ ナレンドラをなぜ可愛がる？ 彼は焼きバナナにかける塩さえ買えないんだよ！」（訳註、ラジャス性の人——ここでは財産や名声のある人、つまり世間的成功者）

聖ラーマクリシュナは部屋の外に出られて、校長と話をしながらジャウ根台タウの方に歩いて行かれた。一人の信者が水壺とタオルを持って従って行く。今日、カルカッタへ、チャイタニヤ・リーラーを観劇に行くことになっているので、その話が出た。

聖ラーマクリシュナ「（校長に五聖樹パンチャバティの杜のそばで）——ラームの言うのは、ラジャス性の人のことだ。そんなに高い座席を買う必要はないよ」

升席まきせき（特等席）の切符を買う必要はない、とタクルルはおっしゃるのだった。

### ハティーバガンにて——マヘンドラ・ムクジェー氏の接待

聖ラーマクリシュナは、マヘンドラ・ムクジェー氏の馬車に乗ってドッキネーシヨルからカルカッタにおいてになった。日曜日、アツシン六日、一八八四年九月二十一日。アツシン月白分二日目、午後五時。馬車のなかにはマヘンドラ・ムクジェー、校長ほか二、三人が乗っている。すこし馬車が進むと、タクルルは神を想いながら半三昧状態から完全な三昧に入られた。

しばらくして三昧は解けた。タクルルは、「ハズラーめがわたしに説教するんだ！ 仕様のないやつだ！」とおっしゃる。すこし間をおいて、「水が飲みたい」とおっしゃった。外界に心を引き下げたため、タクルルはいつも三昧の後にこのようなことを言われるのである。

マヘンドラ・ムクジエー「(校長に向かって)では、何か召し上がるものを持ってきましようか?」

校長「今は召し上がらないと思いますよ」

聖ラーマクリシユナ「(恍惚として)わたしは食べるよ——うんこもしに行くとよ」

マヘンドラ・ムクジエーはハティバガンに製粉工場を持っていた。その工場にタクールをお連れした。そこで少し休憩してから、スター劇場へチャイタニヤ・リーラーを見物に行く予定である。マヘンドラの邸はバグバザールのマダンモーハンジー寺からわずか北によったところにあつた。彼の父は大覚者バラマハサデーシュア様のことをよく知らない。それでマヘンドラは、自宅にタクールをお連れする気はないのである。彼の二番目の弟ブリヤナートもタクールの信者であつた。

マヘンドラの工場内では、寝台の上に敷物が広げてあつた。その上にタクールはお坐りになつて神様の話をしておられる。

聖ラーマクリシユナ「(校長やマヘンドラに向かって) ッチャイタニヤ・チャリタームリタ<sup>リ</sup>を聞きながら、ハズラーはこう言うんだよ——『これはみなシャクテイリイライの活動で、ここにはヴィブー(遍在の大原理)が現れていない』と。遍在の大原理がないところに、どうしてシャクテイがある? ハズラーはこちら(聖ラーマクリシユナ)の意見に逆らおうとするんだよ!」(訳註、チャイタニヤ・チャリタームリタ——平凡社・東洋文庫「チョイトンノ伝1・2」として邦訳あり)

〔ブラフマンは遍在の原理としてあらゆるものに——ほんと純粹の信者は至聖かみの力を欲しがらない〕

「わたしは知っている。ブラフマンとシャクティは不異だ。水と冷やす力のようなものだ。火と燃える力だ。あの御方は遍在の原理として、あらゆるもののなかにいなさる。だが、たくさん強く現れている場所もあるし、少なく現れている場所もある。ハズラーがまた、『至聖をさとつたならば、至聖と同じような力が得られるはずだ。その力を使う使わぬは別として……』とこう言うんだよ」

校長「そういう力をわが手に入れて、しっかり持つておくべきでございます」（一同笑う）

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハッハ、そうだ。手に入れておいて、出してはいけないんだよ！ 何て卑賤しい気持ちだろう！ 富や権力を持った経験のない連中が、富だ、権力だと、やたらに欲しがる。純粹の信者は、そんなもののために祈ったりはしないものだ」

工場には嘔み煙草が用意してなかった。タクールはパーン（キンマ）を持ってこいとおっしゃった。やがて、用を足しに行かれるというので、マヘンドラは水壺に水を入れてきて自分で持ち、タクールを空き地の方へご案内する。タクールは校長の顔を見ながらマヘンドラに向かって、『お前がついてこなくてもいいよ。この人に持たせてくれないか』とおっしゃった。校長はマヘンドラから水壺を受けとって、タクールといっしょに工場の敷地内にある原っぱの方に行った。用を足して、顔と手を清めると、タバコの用意ができていた。するとタクールは、校長に向かってこう言われた。——「夕方だろう？ それじゃタバコはやめにしよう。夕方になったら仕事はいっさい止めて、ハリ（神）を思い出すことだよ」そして、ご自分の腕の毛をじっと見ていらっしやる——毛を数えられるかどうか。毛が数えられなければ、夕暮れになったということなのだ。

## 劇場でのチャイタニヤ・リーラー——聖ラーマクリシュナの三昧境

〔校長、バブラーム、ニティヤーナンダの家の信者、マヘンドラ・ムクジェー、ギリシユ〕

タクルのお乗りになった馬車は、ビードン通りにあるスター劇場の前に到着した。夜の八時半ころである。校長、バブラーム、マヘンドラ・ムクジェーほか、一、二の信者がお伴している。彼等がチケットを買うことについての相談をしていると、劇場のマネージャーであるギリシユ・ゴーシユ氏が数人の職員といっしょに馬車の傍に来て、ていねいにあいさつをしてから、タクルを二階の席にご案内した。ギリシユは、大覚者様のお名前を聞き知っていたのである。この方が、チャイタニヤ・リーラーを見物にいらっしゃったと聞いて、この上なく喜んでいた。彼はタクルを南西の<sup>さじき</sup>棧敷にお坐らせした。タクルの横に校長は坐った。その後ろにバブラームほか二人が坐った。

劇場はランプが沢山ついていて、非常に明るかった。階下の席には人々がぎっしり詰まっている。タクルの左方に垂れ幕が見える。二階の<sup>さじき</sup>棧敷席もいっぱいである。<sup>さじき</sup>棧敷の後ろに男が立っていて、ウチワで風を送っている。タクルを扇いでさしあげるようにと、ギリシユが言いつけたのである。タクルは劇場を見渡して、子供のよう嬉しがっておられる。

聖ラーマクリシュナ〔校長に〕アツハツハツハ、ワー、此処はいいねえ！来てよかったねえ！人が大ぜい集まると靈感が起きる。そして、あの御方が一切のものになつていなさる、ということがはつきり見てとれるんだよ！

校長「はあ、さようでございますか」

聖ラーマクリシュナ「この席はいくらなんだろうね？」

校長「はあ、料金は取りませんでしょう。あなた様のお越しを、劇場の人たちは大そう喜んでおります」

聖ラーマクリシュナ「みんな大実母<sup>マ</sup>のおかげだよ！」

幕が上がった。と同時に、観衆の視線はステージに釘付けされた。最初は罪と六つの敵の会合のシーン。その後の森の小路で、ヴィヴェーカ（識別）、ヴァイラーギヤ（離欲）、およびバクティ（信仰）が話をしている。（訳註、六つの敵——色欲、怒り、貪欲、高慢、嫉妬、愛着）

バクティが言う——「ガウランガがナディアにお生まれになりました。そのため、ヴィディヤードリーたち、そして聖者<sup>ムニ</sup>、見神者<sup>リシ</sup>たちが姿を変えて、ゴラにお目にかかりに来ていらつしやいます」

（歌）

おめでとう、ナディアにゴラがやってきた

ゴラ——ガウランガはチャイタニヤのこと

ごらんよ、ごらん、空とぶ車にのって

ヴィディヤードリーたちがハリ（神）に会いに来る

ヴィディヤードリー——知識を持つ者<sup>ムニ</sup>の意で、地上と天上の間に住む人間に恩恵を与える女神



ごらん、愛の欲びに夢中になつて  
ムニヤリシたちがみなやつて来る

ヴィデイヤーダリーたち、ムニ、リシたちは、ガウランガが至聖かみの化身であることを認めて、讃詞を捧げる。タクル、聖ラーマクリシュナはその情景を見て、もう法悦に恍惚となつてしまわれた。校長に向かつて、「アハー、何とまあ、ごらんよ！」

ヴィデイヤーダリーたちとムニ、リシたちは讃詞を合唱した——

男性合唱(ムニヤリシ)——ケーシヤフよ、低きものをあわれみ給え、森をさまよつのが好きなお方よ

女性合唱(ヴィデイヤーダリー)——マーダヴァ(訳註)よ、可愛い御方よ、笛を吹いて私たちの心を盗む御方よ

男女合唱——ハリボロ、ハリボロ、ハリボロ(ハリの名を唱えよ)、わが心よ

男性合唱——ヴラジャの永遠の若者、毒蛇カーリヤを退治し、苦惱と恐れを滅し

女性合唱——弓のような目、弓のような孔雀の羽根かざり、ラーダーの心をとかして

男性合唱——ゴーヴァルダナの丘を持ち上げ、森の花々で全身をかざられたターモ(訳註)ーダラ(クリシュ

ナ)、カンサ(訳註)に天罰をあたえた御方よ

女性合唱——ゴーपीたちと輪になつて踊る、黒い肌の美しい御方

男女合唱——ハリボロ、ハリボロ、ハリボロ、おお わが心よ

ヴィデイヤーダリーたちが、弓のような目、弓のような孔雀の羽根飾り、ラーダーの心をとかしてと歌ったとき、タクル、聖ラーマクリシュナは深い深い三昧に没入された。コンサートはつづいてるが、タクルは外界の意識を失っておられる。

チャイタニヤ・リーラー見物——ガウルの愛に酔う聖ラーマクリシュナ

(次のシーン) ジャガンナート・ミシュラの家に客が来た。ミシュラの息子ニマイ(チャイタニヤの幼名)は喜々として仲間といっしょに歌をうたいながら遊びまわっている——

(次の歌はチャイタニヤが自分をクリシュナであるとして歌っている)

(訳註2) ケーシャブ——「長い髪の毛を持つ者」の意味でクリシュナのこと。

マダーヴァ——「ヤーダヴァ族の王マドゥの子孫」の意味で、クリシュナのこと。

ダーモダーラ——マトゥラーの悪王カンサに殺されるのを防ぐために、ナンダとヤショダーのもとで育てられた幼いクリシュナは悪戯好きで、ある時、ヤショダーの牛乳からバターをとるための壺をこわし、中のバターを食べてしまったので、罰として体に縄を巻きつけられて大きな器に縛り付けられたが、クリシュナはこの器を引きずって歩き、引っかかった木を引き抜いてしまった。このことからクリシュナは、ダーモダーラ(腹に縄を巻かれた者)と呼ばれるようになった。

カンサ——クリシュナの伯父、極悪人

懐かしいプリンダーヴァンはどこだ

ヤシヨードー母さんはどこにいる？

父さんナンダはどこにいる

バライ兄さんどこにいる？

白黒ふたごの牝牛はどこに

ぼくの魔法の笛はどこ？

シュリー・ダーマ、スターマの二人の友は

どこへ行ったら会えるのか？

懐かしいヤムナーの岸はどこ

涼しいバニヤンの木かげはどこだ？

牛飼<sup>ゴ</sup>い乙女<sup>ビ</sup>はどこにいる

かわいいラーダーはどこにいる？

客は目を閉じて至<sup>か</sup>聖<sup>み</sup>に食べ物を供える。ニマイは走りよってその食べ物を食べる。客はニマイが至

聖であることを知って、十アヴァターラに捧げる讃詞を唱えて大満足の状態——ミシユラとサチーのもとを去るにあたって、彼は讃詞を歌う——（訳註、ミシユラとサチー——ニマイチヤイタニヤの父と母）

永遠の歓び、満月の如きガウルに栄えあれ

この世の救い主に栄えあれ

よるべなきものの保護者、生あるものの命

悩みと怖れを滅す御方よ——

時代、時代の舞台は移れど

新しき舞台に新しく遊戯し

新しき波をおこし、新しき物語の

一章を語りつづける御方よ——

全世界の重荷を背負いて、愛の水をふり注ぎ

われらの悲しみと苦しみをとり除き給い

不幸な者たちの希望となり、罪障を滅尽し

悪と恐怖を消滅し給わんことを

この讃詞を聞きながら、タクールは法悦に身震いをなされた。

次はガンジス河畔のナバドウィープ——ガンガーの聖水で沐浴した後、バラモンの男女がガートで礼拝をしている。ニマイが供え物をつまんで食べはじめた。一人のバラモンがいたく立腹して怒鳴る——「この恥知らずめ！ ヴィシユヌ神に供えたものを盗み食いするとは——。無間地獄に墮ちるぞ！」それでもニマイは平気でそれをつまみあげて逃げようとする。多くの女たちはこの少年が大好きだったので、ニマイがあちらへ立ち去るのを見て我慢できなくなり、声をあげて彼を呼びとめる。「ニマイ、戻っておいでよ。ニマイ、戻っておいでよ」でも、ニマイは聞こうとしない。

一人がニマイをこちらへ呼び戻すために、功德のあるマントラを唱える。〃ハリボロ、ハリボロ〃というマントラである。すると、その途端にニマイは、〃ハリボロ、ハリボロ〃と言いながら戻ってきた。モニ(校長)はタクールの横に坐っていたが、思わず「ああ！」と嘆声をあげた。

タクールはと見ると、もうジツとしていられないご様子だ。「アハー、アハー」とため息をつきながら、モニの方を見やうて法悦の涙を流しておられる。

聖ラーマクリシュナ(バブラームと校長に向かつて)ね、わたしが半三昧ハイツァになったり三昧に入ったりしても、お前たち、騒がないでおくれよ。そんなことすると、世間のやつらはわたしをベテン師だと思ふだろうからね」

(場面)ニマイは聖糸を授けられる。ニマイは出家の衣を身につける。母サチーや信者の婦人たちが

周囲に立っている。ニマイは歌をうたいながら托鉢をする――

お願い、みなさん施して下さい

わたしは新米のヨーギー、大声をあげて歩きまわる

ああ、ヴラジャの人たち、私はみなさんが好きだ

ああ、母さん、だからお腹をすかして来るのです

ヨーギーは戸毎に食を乞い、喜捨と言つて立ち

日が暮れたらヤムナーの岸に戻り

たった一人でねむるのです、母さん

目からこぼれる水が、川の水といっしょになって

静かにやさしく流れて行くのです

周囲に立っていた人はみな退場し、ニマイは独り舞台に残っている。神々がバラモンの男女の姿をして彼を賛嘆する。

男性たち「月のように輝く身体からだの矮人こびと(ヴァーマナ(訳注))の姿をとったヴィシシュヌの化身に南無し奉る」

女性たち「あなたはゴビーたちを魅惑し、森の木かげをさまよい――」

ニマイ「ラーダーに栄えあれ、聖なるラーダーに栄えあれ」

男性たち「ヴラジャの少年たちと遊び、愛の神マダナの誇りをください——」

女性たち「ヴラジャの女は愛に狂い、ヤムナーの水は愛に波立つ」

男性たち「悪魔を欺くもの、ナーラーヤナよ、神々の隠れ家よ」

女性たち「ヴラジャの野を遊びまわり、牛飼いの妻たちの誇りをむさぼる御方」

ニマイ「ラーダーに栄えあれ、聖なるラーダーに栄えあれ」

タクール、聖ラーマクリシュナはこの歌をききながら三昧に入られた。ここで幕が下りた。コンサートはまだつづく。

〔世間の人は二兎<sup>にと</sup>を追えと言う——ガンガーターズとシュリー・ヴァース〕

(次の幕) アドヴァイタの家の前でシュリー・ヴァースたちが話をしている。ムクンダが甘くやさしい声で歌をうたう——(訳註、シュリー・ヴァース——チャイタニヤより年上であるが家族ぐるみで親しくしていて弟子となった)

もう眠るな 心よ

マーヤーの暗黒<sup>くらみ</sup>に いつまで眠っているのか

お前は誰で なぜこの世に来たのか

ほんとの自分を忘れているね

眼まなこをはつきり開あけて

悪い夢から覚めるのだよ

矢のように流れ去る

はかないものにしがみつかずに

永遠のいのちの歓びを

しっかりとつかみなさい

悲苦の暗闇から抜け出して

かがやく太陽を仰ぎなさい

ムクンダの歌は実に美しい声だ。聖ラーマクリシュナはモニにほめちぎった。

(訳註3) ヴィシュヌ神の第五番目の化身で、矮人こびとの意。トレーター・ユガの時代、悪魔バリが天界、地上、地下の三界を支配していた時、ヴィシュヌ神は矮人こびとに化身し、バリに自分が三步で歩けるだけのところをくれるように願ねがい、それが聞き入れられると巨大な姿になって、三界をとり戻した。



(場面) ニマイが家にいる。シュリー・ヴァースが会いに来た。彼は先ず母のサチーに会う。サチーは泣きながら、「息子は、家住者としての義務を果たすつもりがないのですよ」と言う。

兄のヴィシュワルーパーが行ってしまつて(世を捨てて)からは

一刻たりと心の休まる間はない

弟のニマイも出家しないかと心配で――

そこへニマイがやってくる。サチーはシュリー・ヴァースに語りつづける。

ほーら、見て下さい

まるで気がふれたように

涙が流れつづけて 胸までビツシヨリ

おねがい、教えて下さい

どうすれば、あの気持ちが変えられるのか

ニマイはシュリー・ヴァースを見ると足にとりすがつて泣き叫ぶ――

ああ、主よ

クリシュナへの信仰を持ってないならば  
今生このよの私は、無駄なつまらぬ空しい生涯いのち

ああ、主よ 教えておくれ

クリシュナは何処どこに、何処どこに行けば会える？

あなたの体のほこりと

お足の塵を私に下さい

野花の首輪をさらりとかけた

あの黒い美しい御方に会えるように

聖ラーマクリシュナは校長の方を見て何か言おうとなさるのだが、どうしても言うことがお出来にならない。声が詰まってしまったのだ！ 涙が頬をつたって流れている。ニマイがシュリー・ヴァースの足にしがみついて、「ああ、御主人さま、クリシュナへの信仰がまだ出来ません」というのを凝然じじつと眺めておられる。

舞台は進んで、やがてニマイは私塾を開くが、生徒を教えることができない。彼が以前に教わったガンガーダースが訓きとしにやってきた。シュリー・ヴァースに向かってこう言う——「シュリー・ヴァー

ス先生タクトル、我々もバラモンでヴィシヌを祀って拝んでいます。あなた方は見たところ、ニマイの将来を台無しにしておられる」(訳註、ガンガータース—チャイタニヤの先生)

聖ラーマクリシュナ「(校長に)あれが俗物の教訓だ。——これもしろ、あれもしろ。俗人が説教するときはきつと、両方を適当にしろ、と言うんだ」(訳註、両方——世間の仕事と神に仕えることの両方)

校長「まったく、おっしゃる通りでございます」

ガンガータースはまたニマイに向かって説得する。——「なあ、ニマイ、お前はもちろん聖典をよく勉強したね? さあ、私と議論をしよう。世間の仕事よりもっと大切な仕事があるのかどうか、私に教えてくれ。お前は家住者だ。家住者としての義務を全うせずに、なぜほかのことをするのだ?」

聖ラーマクリシュナ「(校長に)わかったかい? 両方を適当にやれと言っているのだろうか!」

校長「ほんとうにそうですね」

ニマイは言う。「私は家住者の努めをわざと放り出しているではありません。それどころか、どれも大切にしたいと思っっているのです。でも——

師よ、どういう理由か何一つわからない

わたしの魂を引きずっていくのは誰か

この岸につかまっていたいと思っても

どうしてもそれができないのです

わたしの魂はもう戻らないかも知れぬ

いつも、いつも、無辺の大海に

飛び込みたいと希っているのです

聖ラーマクリシュナ「アー！」

**劇場にいたニティヤーナンダの家系の子孫と聖ラーマクリシュナの靈感**

〔校長、バブラーム、カルダのニティヤーナンダ家系のゴースワミー〕

ナバドウィープにニティヤーナンダがやってきた。彼はニマイを探し回ってやっと会う。ニマイも彼を探していたのである。対面した後で、ニマイはこう言う――

すばらしくも実り多いこの生涯

私の夢は正夢だった

夢でみた人が、会いに来てくれた

聖ラーマクリシュナ〔校長に向かって、声を詰まらせてタドタドと〕ニマイが言ってるね、夢で会ったって！〕

シユリー・ヴァースは六本腕の相を拝し、讃詞を奉っている。

タクール、聖ラーマクリシュナは、半三昧状態で六本腕の神姿を拝していらつしやる。

ガウランガ(ニマイ)は神に憑かれた。彼は、アドヴァイタ、シユリー・ヴァース、ハリダースたちを相手に、恍惚として話をしている。

ガウランガの気分を理解して、ニタイ(ニティヤナンダ)は歌をうたう――

クリシュナは何処にいる

森に行つても姿が見えぬ 魂の友よ!

さ、クリシュナをおくれ

さ、クリシュナを連れてきておくれ

ラーダーの心はクリシュナでいっぱい

聖ラーマクリシュナは歌を聞きながら三昧に入られた。長い間、その状態のままでおられた。コンサートはつづいている。やがて、タクールの三昧は解けた。その間にカルダのニティヤナンダ・ゴースワミーの家系だという一人の紳士が棧敷に来て、タクールの席の背後に立っている。年のころは三十四、五才であろうか。タクールはその人を見て、大そうお喜びになった。その人の手をとって、何かとお話をなさる。時々、彼に向かつておっしゃる。「さあ、此処に坐っておくれ。あんたが此処

にいと、靈的な気分がとても強くなる」やさしく手をとつてもあそんだり、彼の顔をなげたりしておられる。

この人が立ち去ると校長に向かつて、「あの人は立派な学者だ。お父さんはまた、立派な信仰あつてい人だよ。わたしがカルタのシャーマスンダラを参拝に行くと、百タカ出しても追いつかない程の招待<sup>もせな</sup>をしてくれるよ。

あの人はとてもいい特徴<sup>しるし</sup>を持っている。ちよつとゆさぶると靈性が目覚めるだろう。あの人を眺めているうちに、とても気分が高まった。も少しで辛抱できないところだった」

このゴースワミーを見ているうちに、もう少しでタクールは法悦三昧に入るところだった、とおっしゃるのである。

幕が上がった。大通りをニティヤーナンダが頭に手を当てて、流れる血を止めようとしている。マダイが壺のカケラで殴ったのだ。だが、ニタイは見向きもしない。ガウルへの愛で泥酔したようになっているからだ。タクールは前三昧状態である。ニタイが自分を殴ったジャガイとマダイをかき抱く様をごらんになったので——。ニタイはこう言うのだ——

命をこめてハリの名となえ

マダイもジャガイも来て踊れ

殴ったことなど忘れてしまった

ハリの名となえて踊ろよ兄弟

ハリボロ、ハリボロ　ハリの名いえば

愛しいハリが抱いて下さるよ

声高らかにハリの名を

天にもとどけと　さあ唱えよう

愛のよろこび味わいたければ

ハリの名に泣き　心の月を見よう

愛をこめてハリの名をあげよう

愛をこめて私(ニタイ)は君たちを呼ぶよ

今度は、いよいよニマイが母サチーに出家の志を打ち明ける。母は氣を失つて倒れる。この情景を見て、観衆の多くはハラハラと落涙した。聖ラーマクリシュナはビクとも動かずに、ジツと眺めておられる。ただ両眼のすみから、一筋の水が糸のように流れているが見えるだけである！

ガウランガの愛に酔う聖ラーマクリシュナ

芝居は終わった。タクールは馬車にお乗りになる。一人の信者が、「いかがでございましたか？」とお聞きした。タクールは笑いながら、「事実そのままだと思つたよ」とおっしゃった。

馬車はマヘンドラ・ムクジェーの工場に向かつて行つた。急にタクールは半三昧になられ、やがてうっとりとした様子で独り言をおっしゃる――

「ハー、クリシュナ！　へー、クリシュナ！　智慧のクリシュナ！　生命いのちのクリシュナ！　心のクリシュナ！　真我アトマンクリシュナ！　肉体デーハクリシュナ！」それから、「命のゴーヴィンダ、わたしの生涯！」馬車はムクジェー工場に到着した。マヘンドラはいろいろ工夫して、お口に合うような食べ物を提供した。横に坐っているモニにタクールはやさしく、「お前も何かお上がりよ」とおっしゃって、甘いものを手ずから分けて下さつた。

やがて、聖ラーマクリシュナは南神村ドッキネーシヨルのカーリー寺にお帰りになる。馬車にはマヘンドラ・ムクジェーの他に、二、三人の信者が乗っている。マヘンドラはタクールをお送りするのである。タクールは上機嫌で、途中、歌などをおうたいになつた――

ガウルとニタイ、君たち二人の兄弟は――

一八八三年二月十四日に全訳あり

モニもいっしょに歌つた。

マヘンドラは聖地巡礼に行く予定でいる。タクールとそのことについて、いろいろお話ししている。



聖ラーマクリシユナ「(マヘンドラに向かって笑いながら) 愛の芽は放っておくと枯れてしまうよ。すぐ戻っておいで。アー、ずい分まえ前から、お前のところへ行きたいと思っていたんだが、今日行けてよかったなあ」

マヘンドラ「はあ、私の人生は実に恵まれております！」

聖ラーマクリシユナ「お前はもともと恵まれているんだよ！ お父さんとてもいい人だし！ いくつか会ったことがあるが、アディヤートマ(ラーマヤナ)をしつかり信じていなさるね」

マヘンドラ「(私も)信仰を得ることができませんように、お恵みを授けて下さいまし」

聖ラーマクリシユナ「お前は寛大で誠実だ。心が寛ひろくて誠実でないと至聖かみをさとることはできない。不誠実な、ずるい心からは、はるか遠くに至聖はいなさる」

マヘンドラはシャームバザールのところで別れて行った。馬車はそのまま進む。

聖ラーマクリシユナ「(校長に) ジャドウ・マリックはどうしている？」

校長は内心思っていた——タクルルは、信者たち皆の身の上に心を配っていらつしやる。チャイタニヤヂャイア様のニヤように、この御方も、人びとにバク信仰アを教えるために、この世に化身してこられたのだからか？